

公開講演会

一神教と多神教—新たな文明の対話を目指して

日 時／2004年10月30日(土)午後1時30分～4時  
 会 場／同志社大学 今出川キャンパス 明德館21番教室  
 講 師／中沢新一(中央大学総合政策学部教授)  
 小原克博(同志社大学大学院神学研究科教授)  
 司 会／森 孝一(同志社大学大学院神学研究科教授)  
 主 催／一神教学際研究センター

講演の概要

日本の論壇で、特に9・11以降、一神教と多神教をめぐる論説を多く見かけるようになりました。仏教の立場から、一神教の問題点を批判し、多神教の現代的な可能性を積極的に説く人も少ない。

しかし、一神教が多神教かという二者択一では、問題は解決しないでしょう。文明論的視点から、両者の関係や問題点を考えていく必要がある。

また、一神教世界における紛争の問題や、それを解決していく方法に対する関心を寄せる人は国内にとどまりません。グローバル化する世界の中で、多くの問題が、ユダヤ教・キリスト教・イスラームといった一神教に対する理解と洞察を必要としている。相次ぐテロに象徴される、混迷する世界秩序の中で、共有可能な価値観を見出し、安定した基盤を作り出していくことは、危急の課題であるといえる。

この講演会では、そうした一般的な関心に応えつつ、学問的な立場から、一神教と多神教の関係を整理し、今後の議論を啓発する積極的な問題提起をした。

プログラム

- 1.挨拶:森 孝一
- 2.講演:中沢新一「一神教と多神教—グローバル経済の謎」
- 3.講演:小原克博「多神教からの一神教批判に答える—文明の相互理解の指標を求めて」
- 4.休憩
- 5.ディスカッション・質疑応答

一神教と多神教  
—グローバル経済の謎—



中央大学総合政策学部教授  
中沢 新一

今日は一神教学際研究センター主催の講演会に招かれましてとても光栄に思います。と言うのは、僕が学生の時に宗教学などを学び始めた時、将来自分は何を作りたいかということ聞かれると「一神教の研究センターのようなものを作りたい」と答えたことを覚えています。しかし僕は、一貫して一神教の研究者ではありません。むしろレヴィ・ストロースなどが言うような野生の思考とか、民俗学などが相手にしている民俗的な宗教とか、こういうものを対象にして、長い間研究してきました。30代に入ってから、チベット人のところに行って仏教の勉強もしています。ですから、一神教を直接的に自分の生き方や学問の対象としたことではないのですが、僕にとっては一神教というのはとても重大な意味を持っています。何故かと言うと、一神教というのは私の人生の好敵手と申す相手だろうと思います。好敵手でなければ一神教の本質は分からないのではないかというような思いすらありました。人類学や民俗学を研究している人達は、一神教に対しては拒否反応があります。仏教を学んでいる人達の中にも、一神教と一口に言いましても、ユダヤ教、イスラーム、キリスト教と、いわゆるアブラハムの宗教に対する批判は非常に強かった。しかし、その人達の批判を聞いていると、私の中の幼い頃、クリスチャンであった頃の蓄積が反発をします。一神教というのはそういう宗教ではない、この人達は一神教の本質を正しく捉えていない、だからこの批判は正しくないと考えていました。と同時に、同じ研究室にいたユダヤ教

やイスラームやキリスト教の研究者達の発言を聞いてみると、この人達もまた一神教の本質を知らない、何故なら一神教の内部から一神教のことを考えているからだと感じました。好敵手を知るには、その外へ出て、そして愛情と距離をもって相手を見つめなければいけないというのが、僕の対象に対するいつもの態度でした。ですから一神教に対しても、私は深い愛情と、そしてそれに対する違和感というものを常に抱き続けながら対峙して来ました。そして一神教の研究というのが、今日の社会において最も重要なものであるということは、深く認識していました。それは今日現代世界を構成している経済の問題、生活様式—ライフスタイル—すね、価値観、これらの問題を考える時に、一神教の問題を考えないで本質に辿り着くことは不可能であろうと思われたからです。当時、私達が学生の頃は宗教というのは阿片のようなものであって、そして宗教の本質を規定しているのは経済だ—という考え方が非常に強かったわけです。ところが私はこう考えました。いや、経済こそ宗教の一形態であろうと考えたわけです。何故ならマルクスが資本論の中で分析している資本主義社会の構造、この分析方法とそしてこれが現実の社会に適用されているあり方を見ると、これはキリスト教のある本質的な構造と深い繋がりがある。そしてキリスト教無しでは、今日のような資本主義というものには有り得なかつただろうし、西欧文明が地球上でこれ程の影響を持って、一種の覇権を持つようになっている、この事態を説明することすら出

来ないだろうと考えました。と同時に私は、この一神教の宗教というものを知らなかった人類について深い関心を持ってきました。国家が誕生する以前、都市が誕生する以前、人々が農耕を始め、定着を始め、そして都市を作り、そこに巨大な国家が生まれ、国家宗教が作られ、その国家宗教から離脱する形でユダヤ教の宗教が発生した過程を見る時に、私達はどうしてもこの一神教の歴史的な性格に思いを致さざるを得ません。人類、つまり、私たちホモサピエンス・サピエンスが、この地球上で今日と同じような能力を持って生活を始める前から既に、少なく見積もっても4万年から5万年が経過しています。ある考古学者によると、既に9万年から10万年前に、現在と同じ知的能力を持った人類が地球上には既に活動を始めていた、という研究すら発表されています。ということは、数万年の間、人間は別の考え方をもち、この地球上に別の秩序を持って暮らしてきました。この人々が何を考えたか、そしてこの人々が考え得た知的能力と、その中からそれを食い破るようにして現れた一神教というものが、非連続に分離しているはずはないのです。人類の知的能力の中から一神教は発生しています。そしてそれは一神教無しにもやってきた。もっとはっきり言うと、宗教無しにもやってきた。神話と儀礼だけで、この地球上に豊かな世界を作ってきた人類の在り方というものが存在したことをも否定することは出来ません。どちらも人間という同じ能力から出発しています。そして今日の考古学と脳科学が明らかにしていることは、人類がこの地球上に発生した既にその時に、今日の私達とほぼ相違のない知的能力が獲得されていたということ、これらの研究は明らかにしている。ということは、多神教であろうが一神教であろうが、これらの問題を考える土台は私達人間の知的能力というもの—それは直観力と感情を巻き込んだ知的能力ですが—に深い根をおろしているもので、この人類の研究なしには一神

教も多神教の理解も不可能であろうと考えられたからです。ですからそのような意味で、一神教の研究センターというものが日本に生まれなければならぬと考えていました。私達は一神教のことを真剣に考えなさ過ぎました。そして今日のような経済システムを発展させ、銀行のシステム、硬貨のシステムを作り上げてきましたが、ヨーロッパから入ってきた様々な制度や経済システムの背後にあるキリスト教的一神教の問題を根底において考えることを怠ってきました。そのために今日の事態もたらされていると思います。その意味でも、この同志社大学に一神教を研究するセンターが出来たということは、日本の文化にとってもとても大きな意味を持つものと感じています。

今日のテーマは一神教と多神教という問題です。これは私の後にお話くださる小原さんの話にもはっきり出てくることと思いますが、ジャーナリズムやあるいはジャーナリスティックな学者達が書く文章の中に、一神教と多神教の対立ということを中心として先鋭化して、そして今日の世界に起こっている危機的な状況の責任の多くが一神教にある、そして21世紀の世界観は多神教によらなければいけないという考え方が一つのキャッチフレーズようになって横行している事態に対して、一神教を研究する人々が待ったをかけるよう、その理解には問題があると異議を唱えたいために、今日の講演会が開かれていると僕は理解しました。そこに私が呼ばれた理由は、あなた流のやり方でこの一神教と多神教という二元的な構図を揺り動かして解体してほしいという願いを聞き取りました。そこで私は、今日は一神教と多神教という構図を根底から突き崩してみたいと考えております。というのは一神教と多神教という概念自体は昔からあるものではなく、古く見積もっても百数十年の歴史しか持たない概念、つまり、近代的な概念にすぎないということです。そして、この概念が実際の宗教として行われているものに正確に対応して

いるかという、これが殆んど対応していないのです。とりわけ、日本は多神教の民族であると言う時に。では、本当に日本人が考えてきた、信仰してきた宗教、例えば神道であるとか仏教であるとか、純粋な神道とか純粋な仏教というものを日本人が知り始めたのは、不思議なことに明治以降に過ぎません。それまでは神仏習合という状態を長く通過していますから、この神仏習合を基本とする日本人の宗教の中で、純粋な多神教の原理が機能していたか。これは大いに問題とされてよいところだと思います。実際に神道などを見てみますと、ここには一神教と呼ばれる原理と多神教の原理の明らかな混在が見られます。勿論、この世界はたくさんの神々によって成り立っていますから、多神教と申し上げてよろしいでしょうが、この中には必ず神々の世界の中で最も大きい神であり、そして神々の存在を根拠付けている神という概念があります。古事記や日本書紀が著されてからは、これは天照大神という女性の神格に集中するようになりましたが、それ以前は別の神がこの役目を担っていました。おそらくクニトコタチとか、別の神の名前で呼ばれたものが、この神々の中のより大いなる神の位置についていました。このような考え方は日本人に特有のものかと言いますと、そうではないのです。アメリカ先住民の宗教を研究してきた人類学者達は、アメリカ先住民が一神教の概念と無縁ではないということ、19世紀から見出ししていました。彼らの宗教を研究した人々がこう言っています。宣教師がアメリカ先住民のもとへ出かけて、あなた方は多神教徒である、そして、あなた方は神話と儀礼によってこの宇宙の真理を捉えようとしているがそれは間違いであって、この宇宙を創造したたった一人の神がいると説いたところ、先住民達がそのようなものは私達はよく知っていると言っています。この神はグレート・スピリットと呼ばれていました。スピリットはたくさんいます。アメリカ先住民の世界には日本

人と同じように無慮無数のスピリットがいます。しかしこのスピリットを統一し、そのスピリットの存在を与えているグレート・スピリットというものが考えられていました。これは平原部インディアンを中心として大いに発達した概念で、この平原部インディアンにはグレート・スピリットを中心とし、そこから湧出してくる無数のスピリット達をめぐるとの神学的な体系まで作り出されていました。ですから、アメリカ先住民の世界、あるいは日本人の神道の世界にとっても、これが純粋な多神教の原理で出来ていたという言い方は全く正確さを欠いたもので、この中には一神教へ向かおうとする契機がはらまれています。そして、おそらくはこの性格は、新石器時代の人々の宗教全てに共通するものであり、さらに言うと、旧石器時代の人類はこの一神教的要素がさらに強烈だったのではないかとすら推定されています。旧石器時代の人類と呼ぶのは、ネアンデルタール人が作っていた石器を使用していた、私達と同じ能力を持ったホモサピエンス達の文化です。ですから私達の直接の先祖と申し上げてよろしいと思いますが、この旧石器後期の人々の宗教、これは真っ暗な洞窟の中で行われる祭儀を中心にしていました。その真っ暗闇の中で、しばしば光と共に現れる超越的なものの観念が、壁画であるとか熊の骨に施された彫刻や石に残された痕跡から推測されています。旧石器時代の人間達の宗教というのは二つの系統で成り立っていたようです。一つは、男性達だけが秘密結社を作って洞窟の中で行う宗教でした。これは真っ暗闇の中へ入って音と歌と身体運動の踊りと、小さなランプを灯して壁面を照らす灯りが照らし出す絵画だけが作り上げる秘密の宗教の世界でした。この世界、この洞窟の中では、おそらくは極めて強度な超越性についての観念が人間を支配していただろうと考えられています。ところが旧石器時代にはもう一つの宗教の形がありました。これは朗らかな太陽の光のもとで行われて、その主体

になるのは女性達でした。この女性達が行っている宗教は、男性達が洞窟の中で行っていることは抽象性を目指し超越性を目指していたのに対して、この世界の自然の形や生物の形をそのまま具象的に表現するということから成り立っている自然な形の宗教でした。ですから、旧石器時代において、もう既に自然環境とフィットし、そして女性の生命力というものの具体性を基にした非常に柔らかい形の宗教と、真っ暗い洞窟の中で男性秘密結社が行う抽象性の高い、超越性というものを抽象的に取り出す宗教が混在して、同居して、共生していたと考えられています。女性達を中心に朗らかな陽光の中で行われる宗教、これはおそらく多神教の性格を多分に備えていたものであろうと思われる。ここにはたくさんのスピリット達が集っていたことでしょうか。ところが、洞窟の中で行われた男性秘密結社の行う宗教は、超越性をめぐる抽象的な観念に関心を注いでいました。ですから、これを私達の近代的な概念で、

一神教への傾向をはらんでいると申し上げても構わないと思うのです。つまり、旧石器時代で既に一神教に向かう、超越的な高神へ向かう思考というものは働き始めています。それと、朗らかな陽光のもと自然の形とそして生物の活動をもとにしたスピリット・精霊の宗教、これは女性の産む力を土台にした宗教ですが、これを一言で多神教と申し上げるとすれば、旧石器時代から既に多神教的傾向と一神教的傾向は共生していた。むしろ、このことから考えると、人間というものの知的能力の中には、一神教に向かおうとする傾向と多神教に向かおうとする傾向が同時に存在し、この二つが相互に補い合うことによって一つの全体性を作り出していたと考えることが出来ると思います。

私は学生時代に、ドイツの民俗学者のシュミット神父の研究に大変に興味を持ちました。シュミット神父達は戦前のドイツで民俗学の研究を行っていましたが、彼らの研究はとても興味深いものでし

た。それはこういうことを主張していました。一般の宗教史の考え方では、人間はアニミズムの段階から多神教に進み、多神教から一神教の段階に進んだというのが、宗教思想の進化の道筋であると考えられている。しかしシュミット神父達はこう考えました。この考えは根底的に間違っている、人類は最初に超越的な高神の概念を既に持っていた。そして、それが分裂解体を起こした時に多神教が発生し、そして人類は多神教を再発見することによって、原初の人間の知的直感に再び立ち戻ったのだと、こう考えたわけですね。つまり、一神教はモーセとユダヤの民族、あるいはもっと遡りますと、アブラハムの宗教によって発見されたものでなく、ユダヤ民族によって再発見されたものなのだというのが、シュミット神父達の考え方でした。この考え方はとても興味深いものですし、今日の考古学の成果と合わせて見るととても説得力のあるものです。それは、旧石器時代の人類が既に超越的な高きところにある高神についての概念を持っていて、そしてこの高神を中心とする宗教と自然物の中にたくさんの精霊が宿り神々が宿る女性的・母性的な宗教と共存させていたという、最近の考古学的な研究とむしろよく合致するものだからです。

このような考え方をとってみますと、私達は一神教と多神教という概念が極めてあやふやな相対的な概念であるということが分かってきます。つまり、この二つを分離することは出来ないということです。ましてや、分離して、一神教の原理と多神教の原理を対立させることなどは不可能だということになります。人間の知的能力の根源には一神教に向かおうとする傾向と、そしてこの自然の世界の中に諸々の精霊の働きを見出し、それらに神という名前を与えて、多くの神々が集う場所としてこの世界を捉える多神教へ向かおうとする傾向が同時に存在しています。この、同時に存在している

というのがホモサピエンス、私達原生人類の知的能力の本質をなしています。ですから一神教というものが、進化の過程で後になって進化過程としてより発達した高度なものとして現れた、そしてそれは多神教に対立するようになったという考え方は正しくないのではないかと。むしろ私達人類は根源的に生まれた時から既に人間の条件として、人間の知的能力の条件として私達の心の中に一神教への可能性を秘め、そしてこれは潜在的な可能性で止まるものではなく、旧石器時代の遺跡には実際に一神教の超越的なものに向かう表現形態を見ることが出来るという問題を根底に据えていかなければならないと思われまます。つまりこの知的能力を持った人間の中においては、一神教へ向かおうとする傾向と多神教へ向かおうとする傾向は対立しない。対立しないどころではなく補い合う。補い合うどころではなく、それは根源的な一つの能力から分かれて現れた二つの相補的な、お互いを補い合う思考形態として私達の中に宿っているものだと考えるべきではないかと考えます。このようにして考えてみますと、私達は多くの宗教の本質というものをもう一度見直していくことが出来るようになります。

例えば、この旧石器時代以来の人間の思考形態、知的能力をストレートに表現した宗教の形態を、殆んど無傷のままと言いますか、あまり変形を加えないままに成長させた宗教というものが、地球上に一つあります。これはヒンドゥー教の中のシバ派の考え方です。シバ神を中心とする宗教の形態、これはヒンドゥー教シバ派と今日では呼ばれています。この根源は極めて古いものです。ご存知のようにシバ神は大きな男根の石、つまりリングで象徴されます。このリングとそれを囲むヨニ、ヨニは女性器を表現しています。つまりシバ神というのは、男性器を象徴するリングとそれを包み込む女性器ヨニの結合体で表現されておりますが、この表現は既にハラッパ文明にも見い出すこ

とが出来ます。ということは旧石器から新石器への移行期、考古学が中石器と呼ぶ時代に既にインド人はシバ神の概念を持っていた。そしてそれをリングとヨニの結合体として表現する方法を持っていたことを表わしています。この宗教は極めて興味深い特徴を持っています。中心部にそそり立つリングは、我々の世界に存在現象を出現させようとする潜在的な意志ないし力を表わしています。そしてそれはシバと命名されていますが、このシバは、この宇宙を突き動かす根源的な原動力でありエネルギーであると考えられています。ですから新石器的な文化を保った社会、アメリカ先住民や、我々日本の神道の古い考え方におけるグレート・スピリットや高神の観念と極めてよく似たものが、このシバの中に存在しています。しかし、超越性を目指す統一力、リングの形で象徴されるシバだけでは、このシバ神というものは存続出来ません。これを取り囲むヨニ、つまり女性原理が必要だった。そしてこの女性原理は多を本質としています。つまりリングが一を目指すとする、それを取り囲んでいる女性原理であるヨニは多を目指しています。そして多を、多数、多様に様々な世界、この豊かな世界を作っていく原理が、このリングを包み込んでいるヨニの中に表現されています。この二つが合体することによって、シバ神の信仰が成り立っています。

この考えは先ほど申し上げた旧石器時代の宗教、つまり超越性を目指す、高神を目指そうとする観念と、この世界の生命的・存在的な多様性を目指していこうとする傾向、この二つが人間の思考の中では共存していた。そしてその共存の様式を直接的に表現していたことをよく表わしています。このシバ神の考え方は、インドの宗教の中では、長い歴史を辿りながらも本質を変えることなく発展してきました。とりわけ興味深いのは、中世においてこのシバ神の宗教がどういう形をとるに至ったかということです。このシバ神の宗教、つまりリン

が、一の原理を目指す、monoの原理を目指すリングと、マルチmultiを目指す、多様性を目指すヨニの結合体で出来た神の観念が、中世になると一元論monismというものに変容を遂げていきます。シバ・モニズムというものが生まれてきます。これは中世のインドで発達したnon dual非二元論哲学の根源をなしていますが、この中ではシバとヨニ、つまり男性的な原理と女性的な原理、女性的な原理はシャクティと呼ばれるようになりましたが、この二つの原理の結合体はしかし本質において一元論的であるという哲学が発達したのです。つまりこの世界は一と多で出来ているが、その本質を統一しているのは一、これは一という概念を超えた一であるという哲学が発達するようになります。つまり中世インドでは既に、シバ派の哲学を通じて、極めて高度な一元論哲学が発達していました。そしてこの一元論哲学の中では、一者を目指す観念と多様性を目指す観念が一つに結合されておりました。ですから私達がしばしばインド、ヒンドゥー教は多神教の世界であると言いつつ、これは大きな過ちを犯すこととなります。この世界でこそ、実は初めて人類の中のモニズム、一神教あるいは一元論と申し上げた方が良いと思いますが、非二元論的な神の思想、つまり、一元論的な神学が発達し、そしてそれを元にして在来の古い宗教の形を再解釈するという運動が行われています。ですから、こういう現象はアジアの世界においても、あるいは、実はこれはアフリカにおいてもヨーロッパにおいても、そして中近東においてもそう珍しい現象ではありません。一神教的な原理というものを正確に取り出すことは、今までの話からもお分かりいただきましたように、極めて難しいことなのです。なぜならば、この一神教、一を目指す原理というのは、必ず同時に多を目指す原理と共同して働き出します。それが人間の知的能力の中にセットされているからです。ここから考えてみますと、人類の思考能力の中に純粹完全な一神教

というようなものが存在するのだろうかという疑問さえ生まれてきます。

一神教の原理というものをどう捉えるか、これは非常に幾つもの思考の軸をはらんでいます。例えば、イスラームが考えているように「アッラーの他に神なし」という理解をとるとしたら、これはアッラーの他にたくさんいる神の中で、アッラーは唯一のものであるという思考方法になってきます。しかしイスラームの理解というのは何時も、一般の人々が信仰するイスラームと、そしてより高度な知的能力を持った人々が探究するイスラームの二つに別れて発達してきました。そしてイスラームの高度な哲学の中では「アッラーの他に神なし」という理解とは別に、「私は存在でなかったことはない」という理解方法、つまりモーセの前に出現した神が「私は在りて在るものである」という言葉で表現された存在の世界、存在についての、この存在を統一し根拠付ける原理としてのアッラーについての理解が共存していたようです。このアッラーの考え方をとりますと、ここでは一の原理と同時に、この世界が多様なものとして生み出されてくるものを統一的に理解するための一つの神学的な理解が発達しなければなりません。イスラームは決して多の神々、多くの神々を否定したことはなかったと思います。むしろアッラー、つまりこの存在の世界を統一し根拠付けているアッラーを認めさえすれば、本質的にそれは多の神々をこの神学の体系の中では否定する必要はないのであろうし、そして諸々の精霊達というものはムスリムの生活の中でアッラーへの信仰と共存しながら生きることは可能だったはずで、実際に私達がイスラーム世界を仔細に点検して見ますと、そこに決して、精霊の原理が一神教的と呼ばれるアッラーへの信仰によって、完全に掻き消されたり否定されたりしたという例は、むしろ少ないのではないかと考えることが出来ます。そしてイスラームの中でより高度な神学理解を目指そうとした人々が作り出した神の概念、これはタウ

ヒードと呼ばれている神学の形態の中に結晶してきましたが、ここでは一の原理と、そしてこの一が多様性の世界を生み出してくる、この過程を統一している原理こそがアッラーとして理解されています。私達は、このアッラーについてのタウヒードの理解を深く検討してみますと、ここにヒンドゥー教のシバ派がシバ神を中心に打ち立てた非二元論的なモニズムとの深い共通点すら見出すことが出来ます。この二つの間に本質的な違いが本当にあるのだろうかと思ふほどです。ですからイスラームが純粹な一神教であると言う時には、これは多神教との対立軸においては捉えることは出来ないのではないかと考えることが出来ます。おそらく私の話の後に小原さんが偶像崇拝の問題を取り上げるとありますが、一神教理解に別の軸が必要なのだろうと思ふます。そしてその軸を中心にする、一神教と多神教は対立し合うものではないことになってきます。一神教と多神教を対立し合う軸を設定したとすると、イスラームのように、外の世界から純粹で絶対的で融通のきかない一神教と見られているものが、多神教的な原理を放逐するどころか自分の神理解、タウヒードの根源にセットしている、再構成してセットしているという事実を説明することは出来ません。このように一神教原理と多神教原理は極めて複雑な関係を持って発達してきました。ですから今日私達が直面している問題、9・11以後この世界が直面している問題、つまりグローバリズムの問題の本質を考える時に、一神教と多神教を対立させたり、あるいは一神教の内部のイスラームとキリスト教、ユダヤ教の原理をいたずらに対立させて、そこに文明の衝突を作り出そうとするような理解は、少なくとも宗教の構造ということに関して見れば大いに問題のある、殆んど現実には適用されない考え方なのだろうと見る事が出来ると思ふます。

しかし、ここで大きな問題が残ります。それは、今日の世界は経済的な原理を中心にしてグローバ

リズム化の傾向が進行している、これは確かなことです。そして、このグローバリズム化というのは、端的に申し上げれば、19世紀以後の西ヨーロッパに発達した資本主義の発展形態、つまり高度資本主義の形態、ここには情報、そしてインターネットを駆使した情報社会の問題が深く関わっております。情報化された資本主義を一つの原動力として、そこに西欧型の生活様式や娯楽、音楽への嗜好や食べ物への嗜好も含めて一体になったこの全体性、つまり、一言でグローバリズムと呼ばれていますが、そのグローバリズムが今地球上に大きな影響力をもって、私達の生活を根底から作り変えようとしている。この事実を否定することが出来ないと思ふます。そして西ヨーロッパの原理は、西ヨーロッパが世界における植民地時代のような覇権を失うのと同時に、むしろその西歐的原理の種を地球上に飛散させるようにして、今グローバリズムという形態で地球上の人類全体に大きな影響を与えています。この理由、このグローバリズムが何故、この地球上でかくも強大な影響力を持つことが出来るのか。そしてその根底にある近代型の資本主義が何故かほどの成功を収めたのか。この問題を考える時に、私達は先ほどから出ている一神教の構造、とりわけキリスト教の構造というものに思い至らざるを得ないということです。今日の話の最初に、私は、宗教は経済的な現実、つまり下部構造が生み出した幻想であるという考え方を逆転して、経済こそが宗教的思考構造の表現形態だと考え直してみた時に見えてくるものがあるのではないかと考えました。これはマックス・ウェーバーの研究などを遥かに超えて、経済の構造と宗教の構造の根源を探る試みが必要であるということをおっしゃっていると思ふます。そして、そこにキリスト教の神学的構造の問題が深く関与している。おそらくは9・11という形で地球上に先鋭な形で現れている対立の意識、これは表面的に見ますと、キリスト教と原理主義的なイスラームの世界の先鋭な対立と

して現れているものですが、その根底にあるもの、これは一つの宗教原理です。表面的に見ますと、これは確かに経済における格差の問題ですが、この経済的格差が何故作られたかということを追ってみると、これは宗教の構造の問題に帰着してきます。つまり一神教の内部構造の差異の問題に帰着してくることとなります。

イスラームとキリスト教の経済システムと神学上の構造の同型性、差異、違いについての理解については、先ほど私の著作が紹介されましたが『緑の資本論』という本の中で詳しく説明しましたから、今日はもう少しキリスト教の本質について少し踏み込んで考えてみたいと思います。キリスト教は一神教だろうかという問いかけです。これは古くからユダヤ教徒やムスリムが抱いていた疑問です。キリスト教は果たして一神教なのか、この問題が本質に触れています。既にこの問題は、イエス・キリストが神の子であると言われた時から発生し始めました。神の子という存在は、当時の中近東の人々の神話的思考力、つまりこれは人類の根源的な新石器時代以来の思考能力ですが、これを大いに刺激するものとなりました。何故ならば神話的思考というのは、二つの対立している矛盾し合っている論理項をつなぐ媒介項を探すことから、神話的思考というものは成長し、豊かな神話の世界を作ってきました。この媒介項が無いと神話は作動しません。これは純粋な一神教というものを考えてみた時、この媒介項を除去することによって、神話的思考方法にノックダウンを与えている。ここが大きな問題点です。それは人類の思考に起こった飛躍を表わしています。超越的な神と人間を媒介不能な状態にした時、つまり絶対者の概念を作った時に、この二つの領域を媒介するものが消えてしまいます。長いこと人間は神話の思考力をこれに共存させていましたから、神話的思考というものはこの世界を作り上げている絶対的に矛盾している概念、生と死のような概念を媒介

する概念を探す、これが神話の働きでした。そしてこの神話の働きをもとにして、私達の先祖達はあの自然的な宗教の世界を作り上げてきましたが、一神教が行ったことはこの媒介項を拒絶することでした。

ところが、ここに神の子の概念が出現した時、中近東の人々の間で再び神話的思考への大変な情熱が再燃したことが記録されています。イエス・キリストは神の子である、しかしイエスは神なのか子なのか、人間の体を持った神なのか、ならばあの十字架上で死んだあのむくろは何なのか。処女マリアから生まれたという、女性の体から生まれたという、あのイエスという存在の肉体は何なのか。この問題は中近東の人々を大いに刺激することとなりました。ここでキリスト教初期の時代にイエス・キリストの属性をめぐって激しい論争が戦わされたことは、同志社でこういうことをお話しすることは殆んど釈迦に説法かも知れませんが。つまりイエス・キリストの存在自体が、当時の人々にとっては古い神話的思考形態を再燃させる契機をはらんでいました。ですからここでイエスは神である、いや純粋の神である、いや純粋な人なのである、こういうふうには純粋にそれを理解する人々、これは中近東の東の方のキリスト教徒の間に発達しました。西のキリスト教徒は神にして子であるという、極めてparadoxicalな理解を選択いたしました。そして神にして子であるという理解を教義的に確立するようになります。しかしこの教義的に確立したのは、多分に長い論争の結果として生み出された政治的な成果であったような気も致します。何故ならイエス・キリストの属性をめぐっては、この当時、中近東の東の方の人々が考えたようなありとあらゆる異端的思考の可能性は、神話的思考を前提とする限り、否定することは出来ないものだからです。しかしここでイエス・キリストは神にして子である、神と人間の間の媒介者であるという概念が確立しました。ここでキリスト教は限りなく神話

的思考の近くに寄ることになったわけですから、これが後々の東方に発達した純粋思考を行う人々、これは中世以降イスラームを発達させていく人々ですが、この思考をとった人々にとっては極めて疑惑の対象となったわけです。

さらには三位一体説の問題があります。ここには父と子、この父と子の問題は何とか解決がついたでしょう。しかし、ここに精霊が再びセットされました。この精霊は、明らかに多神教的な原理の組織的な組み換えだと見られてもおかしくないところがあります。精霊は無慮無数の霊をもって、精霊の原理がセットされましたが、この精霊はキリスト教に対して批判的な考え方を持つ人々にとっては、多神教の原理を一神教の内部にセットするものに違いないと見られました。実際、精霊は多種多様であって、人間のカリスマ的な活動と共に人間の内部から流出し、あるいは神から流出してくる多様性の原理を表わしていたからです。精霊は多を表現しています。そしてこの多の原理が三位一体論の中に組み込まれています。

さらにはもう一つ、天使の問題があります。天使学はイスラームの中で発達した高度な学問ですが、イスラームの中ではこの天使学はタウヒードの理解と結び付けられ、一者が流出するあるいは産出する多様性を説明する中間的な存在として、天使の学問というものが高度に発達することになりました。ここでも天使は、一神教の理解に特殊な空間を付け加えています。中世の神学を見てみても、天使が住まいする空間は、神がこの世界を創造する以前から創造したと言われています。そして、神は永遠であるが、そこは永在の世界であると言われています。永遠ではなく永在だと言われている。それは存在と非在の中間状態にあって、常に消滅と生成を繰り返しながら、私達の世界に力を注ぎ込んでいる空間であるというふう規定されるようになります。

この天使の空間自体が、実は一神教の内部に

組織替えされ、組み込まれた多様性へ向かう原理を表わしていますが、この存在の多様性へ向かうとする傾向こそ、かつては多神教という宗教形態の中でストレートに表現されたものに他ならないこととなります。ですから考えてみますと、キリスト教自体は純粋な一神教どころか、その一神教をベースにして、その中に多神教的な要素を巧みに取り込んだ、そして一つの統一的な体系を作ることになった唯一の一神教の宗教であったかも知れないと思われれます。

ここに重要な概念として、システムという概念が出てきます。システムの最初の形態は三位一体として出てきました。システム即ち、この世界に起こることの全体性を体系の中に捉え切ること、これがシステムの意味ですが、三位一体を通して一神教原理と神と超越者と人間を媒介する神の子の原理と、そして多様性の原理を一つのシステムの中に取り込むという思考方法が、キリスト教の中で確立しました。神と子と精霊は、むしろ一つのシステムの原型となりました。そしてこれは主に西方キリスト教の中で発達を遂げます。ですから有名なフィリオクエ論争以後、西のキリスト教が持っているシステム論的な傾向を批判した東方教会が離脱し、ロシアとギリシャと東欧の世界が長いこと西欧世界から離脱していく根源を作ったものも、このシステム論に関りがあります。西ヨーロッパ、西の西欧的キリスト教、これはローマ教会を中心とする神学の体系の中では三位一体論、天使論、これらはシステムとして整えられることとなりました。ところが東方教会の中では、システム化を拒絶する傾向が非常に強いものでした。そしてイスラームもこのシステム化を拒絶しました。ですから、世界の全体性を一つの形にシステムとして作動できるものに作り変えるという課題に挑戦し、それに見事な達成を行ったのはキリスト教だけだったということが言えるかと思えます。

さて、もう時間が残り少なくなってきましたから、

残念ながらこの辺で重要な問題を端折って話さなければなりません。資本主義という問題があります。資本主義は言うまでもなく貨幣をベースにした価値増殖のシステムです。ここにキリスト教の本質が深く関わっています。貨幣とは何であるか。これは既に3世紀の地中海沿岸で行われた論争の中ではっきり現れていることですが、貨幣とは観念的なものと肉体的なものの結合体であるという規定が行われています。観念的なものであるということは、そこに抽象的な価値が貨幣の中に刻印されているからです。しかし、貨幣は金や銀や貴金属を素材にし、そこに王の顔の印が打たれています。

つまりこの刻印をもって、抽象的なものと肉体的なものが貨幣の中で同居している、故に、これは実際に当時のキリスト教が語っていたことです。故に、貨幣の構造とイエス・キリストの構造は同一であると言われました。その証拠に、十字架上のイエス・キリストを描いた貨幣の脇に、貨幣とイエスの類似性を暗示した言葉が書き付けられています。つまり、神の子という概念を人類の世界に投げ込んだキリスト教は、それによって貨幣との近親性を早くから作り出すことが出来ていました。ですからこれは、貨幣とイエスの存在というものは、信仰者にとっては極めて不謹慎な考え方に見えるかも知れませんが、しかし、その根底には何か深い構造的な類縁性が存在していました。そして、この貨幣を元に、価値増殖を行います。

何によって価値増殖を行うのでしょうか。キリスト教が中世以後、実際に彼らの社会の中で一般的になった価値増殖という現象を説明するために持ち出した説明原理は、他ならぬ精霊の原理でした。父と子から精霊は流出する、いや発出するとフィリオクエ論争以後のキリスト教の三位一体構造は語りました。父と子から精霊は発出します。それと同じようにと語られていますが、それと同じように貨幣から剰余価値、増殖する価値は発出する

というのが中世ヨーロッパの資本主義理解となりました。そしてイスラームが否定した、価値が自己増殖を行う、つまり貨幣が利子を生むという考え方を肯定するようになります。これはもちろん紆余曲折がありトマス・アキナスなどはこれを否定しておりますが、しかし彼の否定は現実社会の中では流されていくことになりました。キリスト教の世界では、ムスリムが頑強に抵抗した貨幣が貨幣を生む、つまり価値増殖を行っていくという原理が肯定されるようになり、その貨幣が貨幣の子を生む原理を肯定する原理は、むしろキリスト教内部の原理、つまり三位一体の構造の中に求められることとなっています。

ですから私達は、このキリスト教と資本主義の原初形態というものは極めて密接な形で結び付き、そしてそれがより高度な形に発達してくる時、我々の世界に極めて甚大な影響を及ぼすであろうということを予測することが出来ます。何故なら、ここには一神教の原理も多神教の原理も同時に、一つの体系の中に、一つのシステムとしてセットされているからです。もちろん私はこれによってキリスト教の信仰というものを批判しようとする気は毛頭ありません。何故なら、貨幣的な現実のような形に表れているものは、キリスト教の信仰の中の極めて表面的な理解の部分を取り出し、そしてこの表面的な構造をもって経済と宗教を結合することに他ならず、そして神学と神秘的な体験の中ではこのような表面的な理解は常に否定されていた、乗り越えられていたという事実を知っているからです。

しかし先ほども言ったように、イスラームも「アッラーのほかに神無し」というような表現がイスラームの神学的思考であると誤解されるように、キリスト教もまたその表面的、世俗的な理解においてはこの資本主義の構造との同型性を否定できない部分を持つこととなります。従ってキリスト教は無敵のものとなります。むしろ、キリスト教が社会的

な影響力を失うと同時に、それは経済の領域で、三位一体論以後キリスト教の内部で発達したシステム論が、経済的な領域に自らの子を生み、そしてこの経済的な領域で展開する三位一体構造が、実は今日のグローバリズムの原型を作り成しているという事実に思い至ることになります。もう殆んど時間がありませんから、これから先のことを一杯お話したかったのですが、それはまたの機会にいたします。

しかし、最後に申し上げたいことは、今日お話したことからも分かりますように、今日の世界に起こっている事態は一神教と多神教の対立などではないということです。それは資本主義の構造を見ても良く分かることですし、イスラームの神学的な構造を見ても分かることですし、我々が普通多神教と呼んでいるヒンドゥー教の内部の構造を見てさえ、そこにはイスラームのタウヒードの理解と共通するような一神教と多神教の共存構造というものが明らかに存在し、それは多神教の典型と呼ばれる神道の中にすら存在し、そして、日本人は神仏習合の中から浄土教のような宗教を作り出しましたが、この浄土教こそ日本人が自前で作り出した一神教の最高形態であったとすら断言することが出来るからです。一神教も多神教も対立させることなどは出来ません。しかしそれが人類という、この私達人類の知的能力の根源に潜んでいるものであり、それを探究することは今日の世界に起こっていることの本質を理解することに最も大きな力を及ぼすであろうと私は信じています。

この研究センターの発展をお祈りいたします。どうも有り難うございました。

## 多神教からの一神教批判に応える —文明の相互理解の指標を求めて

同志社大学大学院神学研究科教授  
小原 克博



先ほど中沢先生が旧石器時代の人類の認知行動などについてお話しくださり、感銘深く聞きました。私がこれからお話することは旧石器時代から一気に現代にジャンプします。現代の、特に私たちの住む日本社会において、この一神教と多神教がどのように扱われているのか、ということについて、歴史を若干振り返りながら批判的に考察していきたいと思えます。

### 1. 一神教と多神教をめぐる事例

#### 1) 『朝日新聞』記事

最初に、私たちの身近なところで一体どのような語りがなされているのか、それをいくつかのジャンルに分けて紹介し、そこから問題点を抽出していきたいと思えます。ここで大きく三つに分けて事例をそれぞれ挙げているのですが、これらは私が集めてきた資料の一部に過ぎません。一つひとつを丁寧に分析すると、おもしろいのですが、それでは時間が足りませんので、要点だけを紹介し、最後にまとめてみたいと思えます。

一番目は朝日新聞の記事です。私は各社の見解を詳細に調べたわけではありません。たまたま私がよく目にする朝日新聞に色々な記事が載っていましたのでこれを挙げたまでなのですが、他社に較べると、おそらく朝日新聞は一神教と多神教に言及する機会がきわめて多いと思えます。

まず、2003年1月1日号。これは元旦号の社説に載った記事ですが、タイトルが『千と千尋の』精神で—年の初めに考える』となっており、これは

前年に映画「千と千尋の神隠し」が、ベルリン映画祭で金熊賞(ゴールデンベア賞)を受賞したことを踏まえて、これこそが日本の素晴らしい精神なのだ、この多神教精神で我々はこれから頑張っていくのだ、という次のような力強いメッセージになっています。

「文明の対立」が語られている。背景にあるのはイスラム、ユダヤ、キリスト教など、神の絶対性を前提とする一神教の対立だ。(中略)いま世界に必要なのは、すべて森や山には神が宿るという原初的な多神教の思想である。そう唱えているのは、哲学者の梅原猛さんだ。古来、多神教の歴史をもつ日本人は、明治以降、いわば一神教の国をつくらうとして悲劇を招いた。そんな苦い過去も教訓にして、日本こそ新たな「八百万の神」の精神を発揮すべきではないか。

もう少し最近のものですが、今年7月3日に「紀伊山地—多神教を歩こう」という社説が載っていました。ご存じの通り、紀伊山地が世界遺産に指定され、これを各社が記事として取り上げました。朝日新聞の社説では、次のように、一神教同士のいがみ合いが絶えない、しかし紀伊山地、高野山に見られるような神仏習合に見られるような、いろいろな宗教が共存している姿こそが、これからの世界にふさわしい、それを私たちは日本から世界に向けて発信すべきだ、という趣旨のことが記されていました。

日本固有の信仰である神道と大陸伝来の仏教、それらが融合した神仏習合、さらに外来の道教を

とりいれた修験道が共存するという多神教の世界である。世界を見渡せば、イスラム教とキリスト教の対立など、一神教同士のいがみ合いが絶えない。異なる宗教や価値が平和に共存するにはどうしたらいいか。紀伊山地の紹介は、21世紀の世界に日本から発信する貴重なメッセージでもある。

さらに朝日新聞に、「反時代的密語」という連載を哲学者の梅原猛さんが執筆されています。毎回テーマは異なるのですが、梅原さんの言わんとすることはかなり一貫しています。一神教と多神教という軸がしばしば現れます。この7月20日の記事もその一例です。ここで、人類の大量殺戮や戦争は、一神教の持っている原理、人間中心主義が原因であって、これを批判する必要があるということが語られています。そして一神教ではなく、森とか様々な霊と共存してきた多神教こそが人類の平和共存を図るためにもっと役に立つのだ、と語られています。

そして一神教は他の一神教と厳しく対峙して無用の戦争を巻き起こし、二十世紀に起こった人間の大量殺戮が二十一世紀にはより大規模に起こる可能性すらある。このような状況において、あえて人類の末永い繁栄のために西の文明の二つの原理である人間中心主義と一神教を批判する必要がある。(中略)一神教の批判はもっと難しい。なぜなら、多神教は人類の原始時代の妄信にすぎず、一神教こそ真に理性的な宗教であるという通説が今なおあたかも真理であるが如く存在しているからである。私は、多神教は、もともと森に住んでいた人類が森の中のさまざまな生きとし生けるものに人間の力の及ばない霊妙なものをみて、それを崇拜することによって興ったと思う。今もなお自然は人智の及び難い霊性をもつていて、多神教の成立の地盤は決して失われていない。また他者の信じる神を認める多神教は、人類の平和共存を図るためにも一神教よりはるかに有効な宗教であるように思われる。一神教は、森が破壊され

て荒野となった大地に生まれた種族のエゴイズムを神の意志に仮託する甚だ好戦的な宗教ではないか。この一神教の批判あるいは抑制なしには人類の永久の平和は不可能であると思えます。

一神教というのは好戦的な宗教だという断定がここではなされています。だからこそ、この一神教を抑制したり、批判したりする必要があると語られているのです。

### 2) 民主党「憲法提言中間報告」

(2004年6月22日)

少し視点を変えて、政治の世界から一例を紹介いたします。民主党が6月22日に「憲法提言中間報告」を出しました。民主党は現在、日本の二大政党制を担う一翼になろうとして頑張っているわけですが、そうすると当然、憲法についてどう考えるかをまとめる必要があります。その意味で、民主党の「憲法提言中間報告」は憲法に関する非常に重要なマニフェストであると言えます。この文書の最初の大項目「文明史的転換に対応する創憲を」の二番目「未来を展望し、前に向かって進む」という項の中に次のような文章があります。

そして第4に、人間と人間の多様で自由な結びつきを重視し、さまざまなコミュニティの存在に基調を据えた社会は、異質な価値観に対しても開かれた、「寛容な多文化社会」をめざすものでなくてはならない。これもまた、<一神教的な>唯一の正義を振りかざすのではなく、多様性を受容する文化という点においては、日本社会に根付いた<多神教的な>価値観を大いに生かすことができるものである。

この文章からも、民主党が、先ほど紹介した朝日新聞や梅原氏の主張と軌を一にしていることは明らかです。私は6月22日に出された「憲法提言中間報告」をファイルとして保存していました。そしてこの講演会のために、再度、民主党のホームページでチェックすると、何と、この文章が書き換えら

れていたのです。書き換えに気づいたときには、かなり驚きました。もちろん、書き換えは場合によってはあり得ると思います。しかし、もし書き換えたならば、通常は、何年何月何日に改訂したという改訂の履歴を残すわけですが、この文書の場合、何事も無かったかのようにコソッと書き換えられていました。

私は民主党に対し、この改訂がいつ行われたのか、あるいは他の個所にも同様なことがあるのかどうかを問い合わせたのですが、残念ながら回答をいただけていません。やはりこれからの憲法を考えようとしている政党が、やるべきことではないと思います。民主党のその行為自体は決して褒められたものではありませんが、こっそりと書き換えたいと思う意図は分かります。一神教と多神教ということストレートに出してしまって、色々な人から何か言われたのかもしれない。しかし、公にここを直しましたと言うのは少し恥ずかしいのでこっそりと直そうという党内手続きがあったのではないのでしょうか。いずれにせよ、民主党も一神教と多神教の関係を意識しているということがわかったのは、興味深い発見でした。

### 3) 書籍

次に、一般書籍において論じられている内容を紹介します。一神教と多神教の論じ方は、時代の影響を多分に受けていますので、年代を追って比較してみたいと思います。1989年に岩田慶治氏の『カミと神—アニミズム宇宙の旅』という本が出版されています。これはよく読まれた本で、この中でも、アニミズム、あるいはアニミズム的多神教と一神教の比較論が展開されています。しかし、この本の中では、多神教と一神教は対立的には描かれていません。先ほど中沢さんが紹介されたのと似たような形で、一神教と多神教の相補的な関係が、独自のフィールドワークに基づいて記されています。

ところがバブルが崩壊した時代以降、多神教であるとか森の思想ということが強調されてきます。日本経済の変調期とこういった一神教、多神教の言説が現れてくる時期というのはおそらく同調関係にあるだろうと私は考えています。『森の思想が人類を救う』(小学館、1995年、158頁)の中で、梅原さんは次のように語っています。

私は、かつての文明の方向が多神教から一神教への方向であったように、今後の文明の方向は、一神教から多神教への方向であるべきだと思います。狭い地球のなかで諸民族が共存していくには、一神教より多神教のほうがはるかによいのです。

梅原さんは、今までの経済発展であるとか科学の発展というものは、一神教とりわけキリスト教に拠るところが大きいということに認めています。しかし、それが様々な意味で人類に害悪をもたらしている以上、それに一旦終止符を打って、これからは一神教文明から多神教文明へと変っていかなければならない、というのが梅原さんの考え方です。

それから次に取り上げたいのが、町田宗鳳さんの「述語的論理と21世紀」(河合隼雄、中沢新一編『「あいまい」の知』)です。町田さんによると、一神教というのは主語的論理です。つまり「私が」という論理を突き詰めていくと、「私」というのは超越的な神に繋がっていく、つまりそこからすべての論理思考が始まると言います。それに対し、多神教は述語的論理で、私が何々「する」とか、私は何々で「ある」という述語部分というのは非常に多様であるように、多神教はそうした人間の日常生活により密着しているのだとして、一神教と多神教を対比的に扱っていきます。町田さんは基本的に述語論理としての多神教の方に価値を認めるわけなのですが、しかし驚くべきことに最後の結論部分でこの二つは、西田哲学を使って、〈絶対矛盾の自己同一〉的に二つは重なり合っていくのだと言います。非常にアクロバティックな形でまとめられて

いると感じました。

次に取り上げる、坂村健『ユビキタス・コンピュータ革命—次世代社会の世界標準』(角川書店、2002年、12-13頁)では、一神教と多神教をめぐる議論が最先端のITにまで及んでいて、興味深いです。

しかし、それ以上に感心したのは、この言葉(注: Ubiquitous Computing)が「神はどこにでも偏在する」という使い方をされる宗教用語だったということだ。当然キリスト教は一神教の神だから、「同一の神がどこにでもいる」ということであり、ネットワークでつながれた多数の小型コンピュータからなる統合された単一システムがあまねく世界をおおっているという感じを(教養ある欧米人相手なら)うまく伝えるであろう巧みなネーミングであったのである。しかし、その一方で、私のイメージする「どこでもコンピュータ」モデルとは、少し違うのも事実だ。(中略)その意味では私の「ユビキタス」は一神教の神ではなく、あくまでも日本的な八百万の神が「そこにもいて、あそこにもいて、裏のネットワークで話し合っている」というイメージである。そしてこのイメージの方が実現性が高いと思っている。諸般の事情で、残念ながらこれから流行るのはやはり「ユビキタス」という言葉だろう。そういう私自身もはずかしながら使ってはいるのだから、本書の題名もそれにあわせている。しかし、内容はあくまで「八百万のユビキタス」。だからこそ、この分野については日本がリードできるのである。

ユビキタス・コンピューティングを日本社会に根付かせていこうという計画がありますが、その中核にいる人物の一人が、この坂村健という東大の先生です。間もなく我々の日常生活に入り込んでくるユビキタス技術としては、RFIDという電子チップがあります。非常に小さい微小なチップが野菜や様々な商品に取り付けられ、消費者が商品の流通ルートを探ったりすることができるようになります。坂村さんはユビキタス・コンピューティングという言葉で初

めて知った時に、そのネーミングに驚いたと言います。ユビキタスはキリスト教の神学用語として使われていた経緯があります。ユビキタスは「偏在する」という意味で、宗教改革期以降、キリスト教の聖餐式におけるパンとぶどう酒の解釈をめぐって、この言葉が使われていました。キリストの体が、どうしてあそこにもあり、ここにもあるという形で偏在することができるのか、というのが聖餐式をめぐるユビキタス論争でした。もっとも、神の偏在をめぐる議論はギリシア時代からあります。ところが、坂村さんは、一神教的なユビキタスではなくて、八百万の神のユビキタスこそが日本にふさわしいと主張しています。きわめてユニークな発想だと思います。新たな研究のモデルを模索する中で、コンピュータの専門家が一神教と多神教の違いを意識していることは興味深いです。このような対比に悪意はなく、むしろ一神教と多神教との間に健全な競争関係を見いだすことができます。

ところが、このような議論と異なり、偏見や誤解をもたらしかねないような議論もあります。精神分析家の岸田さんと評論家の小滝さんとの対談の一部を紹介します(岸田秀、小滝透『アメリカの正義病、イスラムの原理病—一神教の病理を読み解く』春秋社、2002年、236頁)。

だから、世の中でいちばん迷惑というか害が大きいのは、一神教と一神教との喧嘩ですね。今のキリスト教国のアメリカとイスラム圏との争いというのは、人類の未来にとって非常に危惧すべきことではないかと思います。これはやはり一神教の病理で、はっきり言えば、一神教が人類の諸悪の根元なんです。ユダヤ教もキリスト教もイスラム教も、一神教がすべて消滅すればいいんですけどね(笑い)。

冗談めかしてはいますが、「消滅すればいい」とまで言うとは、かなり問題があると思います。これを笑えるという点に、日本社会における宗教理解の実情が反映されているとも言えます。宗教不要論に同調する人は、日本社会にはたくさんいると思

われますが、その傾向が、昨今は一神教にいつそう強く振り向けられていると言えるでしょう。

さて最後に、養老孟司さんの『バカの壁』(新潮社、2003年、193-195頁)を取り上げたいと思います。最終章で、養老さんは一神教と多神教の問題に触れています。

私の考え方は、簡単に言えば二元論に集約されます。普段の生活では意識されないことですが、新聞やテレビもそういう観点からの議論をしません。現代世界の三分の二が一元論者だということは、絶対に注意しなくてはならない点です。イスラム教、ユダヤ教、キリスト教は、結局、一元論の宗教です。一元論の欠点というものを、世界は、この百五十年で、嫌というほどたたき込まれてきたはず。だから、二十一世紀こそは、一元論の世界にはならないでほしいのです。(中略)バカの壁というのは、ある種、一元論に起因するという面があるわけです。(中略)一元論と二元論は、宗教でいえば、一神教と多神教の違いになります。

ここには、いくつかの基本的な誤りがあります。一つは、現代世界の三分の二が一元論者(一神教)としている点ですが、これは多く見積り過ぎです。現在世界において大体60億から65億の人口がありますが、その内キリスト教徒は20億人ほどで、イスラム教徒が12~15億人ほどだと言われています。ユダヤ教はごく少数なので、数の上ではそれほど気にする必要はありませんが、キリスト教とイスラム教の二つをあわせて32~35億人ぐらいになりますので、世界人口の半分ほどであって、三分の二というのは多く見積りすぎています。それからイスラム教、ユダヤ教、キリスト教が一元論の宗教かどうか、という点に関してですが、宗教学的に見れば、これらの宗教が一元論の宗教などとは簡単には言えません。そもそも、ここで言われている一元論も二元論も、中身がはっきりしませんが、一元論としての一神教を「バカの壁」と見なし、二元論としての多神教を「バカの壁」を越えたものと

見なすことには、残念ながら、歴史的な裏付けがありません。この点については、また後に触れたいと思います。

#### 4) 類型的まとめ

さて、これまでの議論を類型的に次のようにまとめることができるかと思えます。

- (a) ユダヤ教・キリスト教・イスラム教は一神教であるから、対立・衝突を避けることができない。
- (b) 現代世界の問題は一神教(文明)に帰するところが多く、(日本の)多神教(文明)こそが一神教的思考の限界を乗り越え、問題解決に貢献すべきである。

最初の類型では、それぞれの宗教が一人の神をめぐって、これは自分の神だと言うのだから、奪い合いになって喧嘩をするしかないのだ、という論理です。一神教は、喧嘩することを運命づけられた宗教だという印象がここにはあります。もちろん、これは歴史的経緯への洞察を欠いた、ある種の偏見に過ぎないわけですが、この考え方はよく見受けられます。

二番目の類型は、トラブル・メーカーとしての一神教が描かれ、その問題を解決するのが多神教であるという、優劣の価値を伴った対比関係が見られます。日本的なものに優位性を置こうとするこの傾向には、実は様々な先行事例があり、この点については、後に触れる予定です。

現在の日本における、一神教と多神教をめぐる議論の現状を踏まえた上で、一神教と多神教の関係を単純化せずに、問題の根源がどこにあるのかを探求するために、何を見ていけばよいのかということ、次にお話ししたいと思います。

## 2. 一神教の中の多神教理解

### 1) 唯一神信仰における「多神教」の位置づけ

一神教と呼ばれる宗教の中で多神教の問題は

解決しているわけではありません。むしろ多神教をめぐる葛藤はずっとあると言えます。まずどのような位置付けがあるのかということへブライ語聖書(旧約聖書)の「出エジプト記」20章から考えてみます。これはモーセの十戒が記されている箇所です。十戒の第一戒と第二戒を引用します。

あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。

後に生まれたキリスト教やイスラム教にとっても、この部分は重要な意味を持っています。聖書によれば、モーセが十戒を受け取ったのは、シナイ半島のホレブ山です。山に登ったモーセが40日、40夜たっても帰って来ないので、待ちくたびれたイスラエルの民たちは、それぞれが持っている金銀などを集めて金の子牛の像を作り、その周りでドンチャン騒ぎをします。その最中にモーセが現れるのですが、その光景を見て怒ったモーセは、十戒が刻まれた石版を投げてバラバラにして壊してしまいます。常識的に考えると不可解な物語かもしれませんが、このストーリー全体には非常に面白いメッセージが隠されていると思います。

先ほど中沢さんは資本主義とキリスト教の関係を語られましたが、資本主義経済における貨幣の増殖の問題と、この金の子牛の間には密接な関係があります。当時は貨幣ではなくて金ですが、金が集められて一つの像を作っていきます。ある物が集められて増殖していくという非常に原初的なプロセスが、ここではシンボリックに描かれています。

### (a) 「偶像」の意味の射程

次に偶像の意味について考えてみましょう。一神教と多神教が今日のテーマなのですが、一神教

にとって多神教は第一義的な敵対者ではありません。一神教にとっては、偶像崇拜こそが本来的に向き合うべき問題でした。三つの宗教は長い間この問題と関わってきました。近年において、それを非常に鮮烈な形で認識させたのがバーミヤンの仏像破壊の事件でした。タリバーンの人たちが、バーミヤンの仏像をロケット弾で破壊する光景を世界中の人たちが目の当たりにしました。この件の是非については、イスラム世界の中でも解釈が別れていますが、いずれにしてもタリバーンの人たちにとっては、バーミヤンの仏像破壊は偶像破壊の行為に他なりませんでした。

モーセの十戒の第二戒では、いかなる偶像も拜んではならないと記されていましたが、偶像を意味するヘブライ語は「アポダー・ザーラー」と言います。これは物質的な像、つまり視覚的に見える像だけを意味していません。視覚的に見える偶像には「ペセル」という別のヘブライ語があります。ですからここで言っている偶像とは、ペセルという目に見える像だけではなく、たとえば人間の精神が生み出すような様々なイメージやシステムをも含む非常に広い解釈の射程を持っているということになります。人間の願望・欲求によって作られ増殖するモノ・イメージ・シンボル・システム・構造を、広義の偶像と位置づけることができます。人間が作り出してしまったとたんに、人間のコントロールの手を離れて、あるいは人間のコントロールに抗って、自己増殖するようなシステムというものが世の中にあります。資本主義経済もその一つでしょう。それは、人間が生み出したものに違いありません。ところが一旦動き出すと、人間の思い通りにはならないのです。中沢さんの先ほどのご講演での言葉を借りるなら、「価値の増殖」もここに含めることができます。このように、偶像崇拜は非常に古典的なテーマでありながら、同時に現代社会においても、問うべき課題を提示し続けていると言えます。

### (b) 見えざる「偶像崇拜」への洞察

次に、この偶像崇拜の意味を「構造的暴力」との関係で考えてみたいと思います。見えざる偶像崇拜が、しばしば構造的暴力の温床となる、ということですが、まず構造的暴力とは何かについて、著名な平和学者ヨハン・ガルトゥングによる定義を紹介しておきます（『構造的暴力と平和』中央大学出版部、1991年、5頁）。

ある人に対して影響力が行使された結果、その人が現実的に肉体的、精神的に実現し得たものが、その人のもつ潜在的実現可能性を下回った場合、そこには暴力が存在する。

構造的暴力に対置されるのは直接的暴力です。つまり人と人が殴り合う、武器を持って殺傷するのは直接的暴力です。しかし、暴力は人間の身体に直接的に損傷を与えるようなものに限定されるべきではなく、時間をかけて問題が現れたり、蓄積されるような構造的暴力にも目を向けるべきだという指摘は、平和学ではすでに長い間なされてきました。たとえば、ある社会において明らかな経済格差がある場合、あるいは差別がある場合、そこには大きな暴力があるということです。絶対的な貧困の故に、子どもが学校に行くことができず、ストリートチルドレンになって道路で物乞いするしかないとすれば、その子が、もし教育を受けていれば成し得たであろう様々な可能性が、その貧困のせいで大きく狭められていると言えます。そこには構造的暴力があると考えられます。あるいは、女性が女性であるというためだけに就職や昇進において差別されるとすれば、やはりそこにはやはり構造的な暴力があると言うことができます。文明論的な例を一つ考えてみましょう。西洋的価値が優位に置かれ、それに対し、イスラーム的な価値は劣っていると見なされたり、西洋的価値の中でのみ、意味を与えられ、序列化されるような社会の中では、ムスリムの人達は本来の自由を享受することができません。そのような社会には、ム

スリムの社会生活を著しく制限する構造的暴力があると言えます。一般化して言えば、人種差別、宗教差別、性差別などが存在するところには、構造的な差別があると言えるでしょう。

ではこの構造的暴力と偶像崇拜は、どのような関係にあるのでしょうか。偶像崇拜において見逃してはならないのは「見えない」システムとして機能することだと、先ほど説明をしました。見えざる偶像は、資本主義的な力として、あるいは軍事力として立ち現れる場合があります。莫大な富の前に、強大な軍事力の前にひざまずき、それを拝むようにと。

そうした見えざる偶像崇拜の問題をセンサーショナルに示したのが、9・11同時多発テロ事件ではなかったかと思います。ワールド・トレード・センターが破壊され、ペンタゴンの一部が破壊されました。ワールド・トレード・センターというのは資本主義経済のシンボルであり、ペンタゴンは軍事力のシンボルです。つまり、そういった資本主義の偶像、軍事力の偶像というものを破壊することによって、テロリストたちは偶像崇拜の禁止という戒めを果たそうとしたと理解することもできるのではないのでしょうか。もちろん、多くの人命を奪ったあの事件を正当化できる理由など存在しません。しかし、あの崩壊の様子を見ながら、それに対する賛同あるいは賞賛の声がイスラーム世界から聞こえたことも事実です。多数の人の命が奪われ、それに対して深い悲しみを覚える者と、反対に、実行犯たちの勇気をたたえる人たちとの間にある深い溝には、見えざる偶像が立ちだかっていたと見ることができます。つまり一神教にとっての問題は、一神教同士の戦いというよりは、むしろ偶像崇拜との戦いであり、それは今日的な問題でもあるということ、ここで確認しておきたいと思います。

ブッシュ大統領は「テロに対する戦い」を果敢に主張します。テロという直接的暴力を防ぐために一体何が出来るかということを政策的あるいは軍事的に考えています。ところが、直接的暴力の行

為者をいくら叩いたとしても、構造的暴力が存在する限りテロの根っ子は決してなくなることはありません。ですから、テロ問題をトータルに解決していくためには、テロリストたちを包囲するだけでなく、たとえば、一神教世界において偶像と見なされているものが一体何なのかを、もう少しリアルに考えていく必要があると思います。

### 2) 一神教における神理解

次に一神教における神理解を、キリスト教とイスラームに分けて簡単に説明します。

#### (a) キリスト教の場合

唯一なる神という考え方や表現は、新約聖書に現れていますが、排他的な原理として描かれているわけではありません。パウロはローマの信徒への手紙(3:29-30)で「それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人の神でもないのですか。そうです。異邦人の神でもあります。実に、神は唯一だからです」と語っています。ここで異邦人と言われているのは、パウロが伝道しようとしていた地中海世界、つまりギリシアやローマの人たちで、彼らは基本的に多神教徒です。その多神教徒に対してパウロは、多少キリスト教に都合の良い言い方ではありますが、神は唯一だから、ユダヤ人であるとか異邦人であるとかという区別はもはやないのだと語っているのです。ここでは、包括の原理として唯一の神が用いられています。

また、キリスト教の神理解にとっては、唯一神信仰以上に重要なものとして三位一体論があります。先ほどの中沢さんのお話の中では、三位一体論は多神教的なシステムを非常に巧みに組み込んだものとして語られていました。これは伝統的なキリスト教の神学から見ると、ギクリとするような分析です。それだけに非常に興味深く聞きましたが、通常、三位一体論は、多神教との関係からではなく、キリスト論との関係から説明されます。

#### (b) イスラームの場合

イスラームの場合には中沢先生が触れた例以外

にも、聖者崇拜であるとか、シーア派のイマーム崇拜などがありますので、多神教的な要素が見受けられると言えます。しかし、そのことと多神教を許容するかどうかは別問題だと思います。先行するキリスト教の三位一体論を多神教的であると批判し、タウヒード(一つであること、一体性、神の唯一性)を保持するイスラームこそが、もっとも正しい一神教である、という立場をイスラームは取ります。タウヒードに対する徹底したこだわりは、イスラームの最大の特徴の一つと言ってよいと思います。

### 3. 日本およびアジアにおける多神教の影響

#### 1) 今日の大衆文化における多神教・アニミズム的伝統の影響

日本社会で多神教やアニミズムは、どのように息づいているのでしょうか。一昔前であれば松尾芭蕉や宮沢賢治などの作品を通じて、日本の自然観や宗教観を例示することもできたのでしょうか。このやり方は、残念ながら現在の若い学生さんたちには、ほとんど通用しません。むしろ、彼ら・彼女らに対し共有できる自然観や世界観を提示してくれるのは、「となりのトトロ」「風の谷のナウシカ」「もののけ姫」「千と千尋の神隠し」など、スタジオ・ジブリが提供しているアニメ映画だと思います。映画の中で描かれている自然や神々の姿は、世代を超えて共感を得ています。「千と千尋の神隠し」では、様々な神様たちが登場してきますが、それに対し違和感を覚えることは、ほとんどないのではないのでしょうか。

#### 2) 日本近代史における神道の影響

多神教の一例として、神道が日本近代史において、どのような役割を果たしたのか、簡単に触れておきたいと思います。明治時代以降の神道の例を考えると、国内においては、特に教派神道がキリスト教に敵対的な運動を展開したということ

が指摘されています(井上順孝「近代神道のシステムと宗教的寛容」、竹内整一、日本昭男編『宗教と寛容—異宗教・異文化間の対話に向けて』大明堂、1993年、125-144頁)。

しかし、より問題が大きかったのは海外神社の場合です。朝鮮、中国、中国など東アジアの各地で、神社崇拝や天皇崇拝を強要し、大東亜共栄圏イデオロギーを担う、海外における前線基地が神社であったという経緯があります。神社と、神社という名前は付かなくても実質的に同じ働きをしていたものを全部あわせると、1600以上の海外神社があったと言われています。ところが、そのほとんどすべてが日本の敗戦を聞いた現地の人々によって、焼き討ちにされたり破壊されたりしています(菅浩二『日本統治下の海外神社—朝鮮神宮・台湾神社と祭神』弘文堂、2004年)。つまり、神社は人々の間に寛容な形で根付いていたわけではなくて、むしろ抑圧のシンボルであったがために破壊の対象になったと考えることができます。したがって、神道に代表される多神教が異文化に対して寛容であったとは、この近代史の一側面だけをとり、簡単には言えないことがわかります。

仏教に関しては、一点だけ指摘しておきたいと思います。梅原さんは、仏教は多神教であり、だから寛容だと言われます。しかし、仏教は多神教なのでしょうか。仏教界からのはっきりとした反論がないため、このような言い方が長くなされてきていますが、やはり、大ざっぱ過ぎる言い方だと思います。たとえば、真言宗など密教系の仏教は、一神教的多神教のような自己理解を持っていますから、多神教と言われても大きな問題はないかもしれません。しかし、浄土真宗の研究者の方に聞くと、仏教を多神教としてひとまとめにするのは間違っているとされます。一神教という言葉だけでは、ユダヤ教・キリスト教・イスラームの実像を見誤ってしまうのと同様に、多神教という言葉の使い方に対しても、もう少し繊細さが必要であると思

います。

### 3) アジア諸国における多神教の影響

多神教的な社会であるということによって、宗教的寛容や信教の自由が充足しているわけではないことは、他のアジアの国々を見てもわかります。アメリカの国務省が出しているレポート“The International Religious Freedom Report for 2004”(http://www.state.gov/g/drl/rls/irf/2004/)は、世界の国々における信教の自由の現状について詳細な報告をしています。これを見ると、多神教的な風土を持った国々において、必ずしも宗教的寛容が達成されていない、信教の自由が十分ではない、ということがわかります。多神教は寛容である、という言い方は、東アジア諸国においても、当てはまりそうにありません。

## 4. 文明の相互理解の指標を求めて

### 1) 宗教学・神学・政治思想の視点から

一神教と多神教の対立や優劣をことさらに強調するのは、学問的にも正しくないということは今まで述べてきたとおりですが、現代において我々が見るべき問題は、むしろ、それぞれ宗教における穏健派と急進派・原理主義的グループとの間の葛藤です。この葛藤は、アメリカ社会においても大統領選挙を通じて顕在化してきました。先ほど中沢先生が例に出されたヒンドゥー教についても同じことが言えます。インドはネール首相による建国以来、世俗主義でやってきましたが、ヒンドゥー・ナショナリズムが最近力を持ち始めています。一神教的な要素と多神教的な要素を合わせ持ったヒンドゥーの中には、穏健な人達もいれば、ヒンドゥー・ナショナリストのように、暴力的に他の信仰者に危害を加える場合もあります。これが一国の内部の問題として存在しているわけですから、我々が見るべき課題は、一神教と多神教という対立関係ではなくて、それぞれの宗教内、あるいは文明内におけ

る穏健派・リベラル派と急進派・原理主義者の間の緊張関係を、どのように收拾していくべきなのか、という点にあると言えます。

### 2) 文明論的視点から

一神教と多神教に象徴される問題設定は最近現れてきたものではありません。精神的・道徳的に没落し危機に瀕している欧米の限界を乗り越えて、新たな価値・思想体系を提供する東洋、アジア、日本という考えは、繰り返し、現れてきました。一神教と多神教を巡る議論も、その亜種であると考えられますし、また、そのように考えてこそ、そうした議論が持つ歴史的な問題を洞察することが可能になります。

西洋社会が東洋に対し、外部から固定的なイメージを割り当てていたように(オリエンタリズム)、東洋は西洋社会に対する固定的なイメージ(オクシデンタリズム)を増殖させてきました。また歴史的な実像を離れた「表象」によって、外向きの自画像を描こうとする傾向(リバース・オリエンタリズム)もあります。

オリエンタリズムの中で、イスラームが西欧からの観察眼によって評価対象にされてきたように、「一神教と多神教」をめぐる通俗的な議論の中では、しばしば「一神教」がオクシデンタリズムの中に配置され、「多神教」がリバース・オリエンタリズムに配置されます。「近代の超克」論、「アジア主義」に見られるように、日本近代史の中で繰り返し現れてきた、この構造的問題を洞察する必要があります。私たちが本当に文明の相互の指標を求めていくなれば、一神教と多神教という関係ではなくて、文明や宗教の内部における構造や緊張関係をよく見なければなりません。その意味では、二項対立的に語られる一神教と多神教という問題設定は、本来見るべき問題を隠してしまっているように思います。したがって、こうした議論につきまといっている固定的なイメージを取り去った上で、す

なわち、偶像的観念を払拭した上で、より具体的な課題に私たちはコミットしていくべきではないでしょうか。

また、すべての出来事が視覚的なイメージに変換される現代世界においては、あらゆる出来事がインターネットをはじめとするメディアの中で「見せ物」となります。偶像崇拝の禁止が「視覚的なイメージ」の増殖に対し、大きな警戒心を発したことを、私たちは慎重に受けとめる必要があるのではないかと思います。